

追憶

滋賀県 茶本 甚三郎

私は現住所と同じ大津市平津で、両親の元に四人の兄姉の次男として生まれました。

家業は食料品・衣料・呉服等々を商う小さな田舎の百貨店で、従業員も五、六人使用してました。当時としてはかなり裕福な部だったと記憶しています。

学業も義務教育の六年修了後、旧制中学校（五年制の商業科）へ進学、これも無事卒業して家業に従事しました。当時、大正期から昭和の初期は大変不況で、世にいう「大正・昭和恐慌」でした。子供心にも記憶がありますが、子女の人身売買、一家心中、夜逃げ等々が日常茶飯時のごとく語られ、話題となっております。

近江の国（滋賀県）は琵琶湖を中にして四囲を

取り囲んでいる所です。近江八景の名勝で、天下に有名な所や、大津絵になった所があり、徳川時代初期の儒者・中江藤樹先生門下生には、熊沢蕃山はじめ多くの学者が生まれています。そしてこのような人間味豊かな町で成人したことは私の大きな収穫でした。

昭和十二（一九三七）年、徴兵検査で徴兵執行官から「茶本甚三郎、第一乙種合格」と命ぜられ、復唱して無事終了しました。帰宅して親、兄、姉と話し合って「現役兵にならずに良かった」でした。日支事変が日中戦争と呼称が変わり、世の中が軍事色に塗り変えられました。途端に世情が一変し、二・二六事件を含む官憲の取締りは地方自治体から、小さくは隣組（五人組）等までに徹底的に浸透してきて、挙国時代となりました。

五族協和（日本・韓国・中国・蒙古・満州）また広くは大東亜協栄圏、そしてスローガンも「一

億一心」「一億火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」などで戦意高揚を計るという、世はまさに軍国時代・軍部優先となりました。

昭和十二年五月二十日、召集令状が来ました。

翌月六月一日午前八時、京都伏見の歩兵第九連隊へ入隊せよでした。いざ来るものが来ました。日本男子の本懐だ、出陣に対しての心構え、気配り、後顧の憂い無きようにと細心に注意しました。各神社へ必勝祈願の参拝、ご先祖様への御報告、特に京都堀川の「戻り橋」、この橋は出陣する者が一度渡れば必ず戻り来ると言う伝説が有るところで出征軍人は必ず通る橋として有名でした。

姉は千人針の腹巻作りのために女学校や婦人会はじめ、人通りの多い町中で、女性に一針、一針を求め、心を込めて作ってくれていました。しかしこれは後で分かったことでしたが、有難迷惑でした。それは大陸の戦線では入浴もなく、十日も二週間も肌着、禪等は着たままで不潔になり、千

人針が蚤や虱の巣窟となったからです。

親戚や友人知人への挨拶廻り、出陣の宴等々で十日の予定は完了でした。家の表には、応召の日から幟旗が幾流しも立ち並びました。親戚や友人からの激励と武運長久と戦勝の願いを込めた幟でした。同級生だった矢野君と高田君と三人一緒の出陣でした。激励の寄せ書きをした「日章旗」をなす禪にすると、日の丸の赤が肩から胸にかかり、赤禪のごとくになりました。

私達三人は当時の国鉄の石山駅頭にて歓呼の声や日章旗の波に送られ「自分達三人は郷土のため、先人の名を汚す事なく一生懸命頑張って来ます」と挨拶を行い車上の人となりました。列車の発車後も「万歳、万歳」の声援がありました。

時間厳守で午前八時に京都伏見の歩兵第九連隊の衛門を潜りました。受付に古兵が二、三人いて、それぞれ氏名を呼び上げて、各所属中隊へと分されました。この後一番心配なことは、出陣前

に役所の兵事係の言っていた「身体検査」でした。不合格の場合は「即日帰郷」といって、廻れ右で故郷へ帰されるのです。このため悲惨な事件が多く生まれました。これは盛大な歓呼の声で送られて来ているが「日本男子」としては哀しく、自決して相果てたことでした。

自分は身体検査を無事終了、軍装一式貸与で、それまで着用していた私服は付添者が持ち帰れました。父親に「日の丸」の外、全部渡して決別しました。親父さんも寂しさを殺して、ただ「身体を大切に」と言って帰って行きました。自分は第七中隊へ配属が決定しました。

当時の歩兵第九連隊の編成は京都市ほか五郡、滋賀県は大津市ほか六郡よりでした。第十六師団は前述の歩九の外に福知山歩兵第二十連隊、津歩兵第三十三連隊、奈良歩兵第三十八連隊で、これに伴う騎兵（後の搜索連隊）、砲兵、工兵、輜重、その他通信はじめ諸兵站関係よりなっています。

平時兵力は一万人で外地駐留は一万二千人、戦時

編成は二万人に脹れ上がります。原隊は中支戦線に出陣中でした。原隊に兵員の不足が生じた時点で留守隊より増派するようになっていたのです。

連隊本部は部隊長以下副官、付将校、軍旗は出陣中は護衛等はありません。それに各要員の将校、下士官、従兵書記（功績・陣中日誌等の記録）、伝令、作業要員、衛生要員等々で、第一、第二、第三大隊など各大隊においても本部に準じていました。また各中隊は中隊長の下に指揮班があり、付将校、人事係准尉、各係下士官及び兵等でした。小銃中隊十二個小隊があり、第一、第二、第三、第四小隊は小銃で、第五は軽機関銃小隊、第六は擲弾筒小隊でした。重機関銃中隊は二個中隊で軍馬を持っていました。連隊砲・大隊砲・速射砲各中隊も軍馬を持ち、通信は有線・無線中隊がありました。総人員は四、五千人だったと記憶します。

さて、入隊当日は教育係将校より「貴君達は郷

士の榮譽を担って入隊したのだ。立派な軍人として訓練に勉励し、後顧の憂い無きように勤めよ」でした。当日は一日だけ古年兵の指導も優しく「今日一日は貴様達はお客さん扱いだ。明朝の起床喇叭からは気合を入れるぞ」と赤飯にお頭付きの魚が付いていました。自分は第七中隊でした。この中隊は歴代中隊長が陸軍士官学校出身者でした。他の中隊は予備役将校の中隊長でした。それだけ第七中隊は他に抜きん出ていることから教育も厳しく、兵隊も衆の範となれました。

また、幼年学校出身で将来陸軍士官学校から陸軍大学校へ進むという、徹底的な軍人の卵の士官候補生の上等兵が十人、自分達と同室にて起居を同じくしていました。しかし三度の食事は将校集会所で、部隊長以下全將校と同席していました。彼らの階級章は三ツ星の上等兵でも、もう一個桜をモールで囲んだ記章が襟にありました。彼らは陸士第五十一か五十二期生でした。

自分達も日常教練の外に、特に軍人勸諭の暗記

が第一で、歩兵操典、作戦要務令ほか典範令集から日常勤務守則、例えば不寝番・各当番勤務・厳格な衛兵勤務等々の守則を全部丸暗記しました。

現在の頭脳では到底出来得ないことでした。自分は声が大きくて子供の頃から両親に「もう少し小さな声で話せ」と言われる位の大声でした。これが軍隊では幸いしました。班内から一歩外に出る時は必ず「茶木二等兵、厠へ行って来ます」また入室の時は「茶木二等兵、入浴より戻りました」と大きな声で発表します。声が小さいと古年兵から「今なにか虫の声がしていた、今一度官姓名を名乗れ」と再度申告させられました。

なお前述の士官候補生に関連したことです、自分も旧制中学校四年生の時(当時の中学では学業の中に一週に一度の軍事教練の時間があり、配属將校が教官として登校していた)配属の陸軍中尉より「陸・海軍人を志望する者は申告せよ」と勧誘されました。友達の一人在希望し志願したのですが、成績は合格点でしたが思想が不当で不採

用となったのです。彼は後に現役入隊後、幹部候補生の試験で乙種幹候となりました。身体健全で頭脳明晰でも、思想的に受け入れられぬと敗北者のごとします。

自分は勿論、軍人志望、幹部候補、下士官候補等一切希望せずでした。実は男兄弟二人の兄が病弱で両親から「甚三郎、お前が頼りだ」と子供の頃から申され、頼られていたために軍人生活を望まぬと堅く決心していました。

二カ月位経過した頃の夜半に非常呼集で飛び起こされる事件がありました。これは中隊長の酒乱騒動で、それによって中隊長は更迭となりました。新中隊長が着任しましたが、新中隊長は嚴格そのもので、罰則は最高に強烈でした。将校・下士官は申すに及ばず、自分達初年兵にまで服装・言動など厳しく、日夜気の休む暇もなしでした。

昭和十三年八月末近い日に「全員、家族面接許す」との布告があり、翌日家族が面会に来てくれ

ました。食べ物に苦勞していると思って母親が大きな「ぼた餅」を持参してくれました。現在もあの味は舌の上に残り忘れ得ぬ味です。出陣先は不明ですが、多分大陸戦線です。両親からは「くれぐれも飲料水に気を付けよ、身体を大切に行ってください」と言われ別れました。

隊内では出発に先立って兵器の整備を完全に行い、軍装品の支給があり、軍帽から靴下、編上靴まですべて新品で、現在まで着用の衣服は返納と、各班内は大変多忙で慌ただしいものでした。

そして自分達の第一期の検閲も有耶無耶のうちに実施済みとなりました。伏見の兵営から出陣に当たり部隊長の激励の訓示があり、歩武堂々の行進をして、表門で衛兵が整列して喇叭吹奏で見送られた時は心身に極限に緊張しました。

京都駅まで約六百人だったと思う。沿道は旗の波と万歳の声が消えることなく、駅頭では家族友人知人や一般市民が日章旗を打ち振りながら「出征軍人を送る歌など」を合唱し、そして万歳、万

歳の声でした。当時の状況が今も目の奥に残っています。

大阪港では、乗船の関係で自分達は明朝八時に埠頭に集結となり、一度市内の一般旅館に宿泊と決定しました。当時昭和十三年頃は不況でしたが出征軍人に対しては非常に暖かい心情でした。旅館も女将さんから女中さんまで皆さん親切で、自分達の一つ星を見て「新兵さん、頑張って下さい」と言います。そして特別に果物や菓子、饅頭等を運んで下さいました。

翌朝、日の出と共に軍装を整えて、各中隊集合場所へ参集、全部隊揃って栈橋へ行進しました。乗船、出港、ドラが鳴り、汽笛が響く。輸送船は岸壁を離れ一路西方へ海上を滑るごとく進みます。多島美の瀬戸内海から関門を経て玄界灘と目的は上海港でした。武器、火砲・弾薬・糧秣ほか諸物資、軍馬、車輛、兵員もすべて船艙へ搬入、野砲が数門、船首と船尾に固定されていました。

そして砲口は海面を狙っていました。波風立たず、穏やかな輸送でした。

申し遅れましたが自分達は乗船後に発表されました。中支戦線で激戦中の第十六師団・歩兵第九連隊が徐州攻略で進撃中である。我々はその増派救援部隊でした。

恙なく上海へ上陸、指揮官以下部隊六百人は、三井物産の大きな三階建の埠頭倉庫に入りました。内部は軍需物資が山積みされていました。この建物の中で各人に武器、弾薬が配給されました。徒歩小隊は三八式歩兵銃弾三二〇発、手榴弾一発、携帯用鶴嘴兼スコップ一丁、天幕・毛布・防毒マスク等々でした。食料は米穀、味噌、醬油、乾燥野菜等の加工品、缶詰類が二、三個で装具総重量は四〇キロもありました。これで古兵に劣らず活動できるだろうか。いささか心配になっていました。

内地伏見の連隊にいた時の教育係下士官が「野戦に出陣の時は、予定日数以上の食料を携行せ

よ。不測の事態が何日どこで発生するやも知れぬ」でしたが、いざ完全軍装に三日分の食料携行は自分の体力としては過重でした。

上海駅から鉄道にて南京を通過し、無湖と言う町に着きました。ここはかなりの大都市でした。

しかも敵が絶えず襲撃を敢行してくる、それも昼夜の別なくだとの事で、一瞬の油断もできないので充分に警戒せよということでした。兵站本部が駐留し、飛行場位の広大な敷地に野戦貨物所が幾個所にも設置され物資が山積みしており、随所に警備歩哨が勤務していました。勿論内部作業には中国人労働者（苦力）を使用し、軍人や軍属が指揮監督している。

揚子江（長江）には日本船が出入りする立派な港がありました。自分達は二千トン級の輸送船に乗船して、上流へ進み、安慶辺りの港に上陸しました。徐州攻撃作戦のため、一日の行程三〇キロで、ただ黙々と前者の後に付いて、一生懸命に歩くだけでした。自分達は格好は一人前の兵隊さ

んでも、まだ内実は入隊百日の半人前の軍人です。肉親や郷土の人達のことを思いながら弱音を吐かず今日まで来たのだ。「己の苦しい時は人も苦しいのだ」と目的地点まで一週間の行程を朝八時出発、六十分行進、十五分小休止を繰り返して進みました。

昼食の休止は六十分でした。この時間に、農民が逃げてしまっていた畑の作物（野菜）を失敬したり、河川（クリーク）に遊ぶ家鴨を取り押さえて、夕食用に準備するなど、皆迅速に行動していました。とくに先輩古年次兵の行動には、ほとほと感服しました。携行食料の節減を思えば当然のことでした。

当初二日程は晴天で土埃で苦しんだのですが、三日目に雨が降り出すと忽ち道路が泥濘と化し、一步一步の前進が大変になり、軍装品が重く肩に喰い込んで来る。そして雨ガッパから水が滲み込んで、土砂降りになると胸から腹へと水が流れ込んで来る。そこまでは充分忍耐できます。しかし

畢丸が雨水に濡れると、この時点で体内の熱気は半減し、齒の根も合わず、がたがたと胴振るいがします。この解消法としては、一に食事を取るのと、二に乾布で全身を拭き、肌着その他衣服の交換以外に術なしです。

宿営には心を配りました。諸先輩の指導で無人の民家に設営したり、路傍の草原に宿営する場合などには、暗夜の警備警戒の容易な所を選定します。また必ず必要な飯盒炊飯やお茶沸かし（真水は万病の源であるので）などを瞬時に判断して命令下知するのです。個人的な苦勞といえば腹を壊して下痢をすること、行軍中は特に大変でした。世に謂う「小便一丁糞十丁」で、路傍で事に及んでいる間に本隊は遠く前進してしまい、落伍兵となるのです。

自分達補充兵員六百人の引率は、将校は予備役で再召集された大津市出身の柳田中尉が一人で、それに下士官が軍曹と伍長各一人、古参上等兵が二人です。自分達六百人の命運はこの六人の上

官、先輩に託されているのです。思えば心寂しき次第でした。古く遠い昔のことです。種々苦勞がありましたし、戦闘、殺戮的事件は忘却し難く今日まで生きてきました。

昭和十三年九月十五日頃でした。目的地に到着後、本隊は移動し、次の目標は武漢三鎮攻略戦でした。なお記録によりますと九月十六日には河南省商城占領とあります。自分達には一切不明でした。地理不案内のまま、ただ指揮官の命のまま南西に進路を取りました。数日行進した地点で、前面に最大難所の大別山系の連山が横たわっていました（標高一五〇〇〜一六〇〇メートル）。この地の利を十分に熟知し活用した蔣介石正規軍が、所々方々に陣地を構築しており、まさに死角無き戦線でした。最前線の部隊も一時進軍を停止し、敵状を充分偵察し、しかる後に砲兵によって敵陣を撃破した後に歩兵の突進です。しかし前述のごとく地理に精通した敵ですから全軍が苦しみな

らの大別山攻略戦でした。

自分達は軍事物資が山積みしてある兵站支部周辺、村落を含め四囲一〇キロの警備をしました。

勿論兵站司令本部の指揮下にての勤務でした。時は昭和十三年九月頃でした。河南省商城（別名麗城）を占領。自分達は歩兵軍団の最後尾での進軍でした。

商城通過の時は民家の土間にアンペラが敷かれ、多くの戦傷兵士が衛生隊の看護を受けていました。大別山系を完全確保までには約三カ月を要しました。

昭和十三年十二月、新年間近の年の暮によく迎り着きました。第十六師団歩兵第九連隊です。大宇宙から見れば地球は小さいが、中国大陸は本当に広い。自分の歩いた跡は僅かであるが苦勞の程は筆舌に表し得ないほど大きい。そして自分達五十人が第十一中隊へ編入されました。

ここは田舎町ながら立派な城壁を四囲に築いた應城です。ここは湖北省の省都で、この街に第十

六師団司令部が置かれ、自分達の第十一中隊はこの司令部の護衛隊でした。東西南北に城門があり、それぞれの城門の上の望楼に衛兵を立て、分哨を置きました。市内にも随所に検問所を設置し、各小隊が警護していました。自分達応召兵も満足な教育は受けていなかったのですが、結構一人前の働きができるようになりました。

師団司令部が移動することになりました。西方の某市とのことで、自分達は應城守備から原隊復帰を命ぜられ、前線へ出動となりました。移動には必ず敵の攻撃があります。また要所所に敵の地雷原があり、その敷設箇所は現地人には知らせてあります。これは日本軍のみを対象にしたものでしたが、戦車隊の応援協力で難を免れたことも再三ありました。輜重隊の物資輸送の自動車も攻撃され、地雷原で数回爆破され、自分の小隊も小隊長と兵二人が戦死しました。その夜茶毘に付すため屍衛兵に立哨しました。古年次兵に種々教え

を受けて一夜勤めました。現地の前線ですからすべて簡略に行い、東天の白む頃には完全に骨灰となりました。

朝八時頃に故人名を書いた紙を付けた小さな木箱が本部から持参され、それぞれの戦友が骨上げを行いました。そして三八式歩兵銃に着剣し捧げ銃にて精霊に祈りました。彼らの御霊は天翔けて靖国の御社へ、はたまたそれぞれの故郷へ帰られたらうか。

次なる攻撃目標は洛陽攻略でした。蒋介石の中央正規軍が頑強に守備しているので友軍も作戦上大変苦しんでいる様子でした。敵には戦車と対戦車砲が無いから日本軍の僅かな戦車でも最大の戦果を挙げることができました。今思い起こしても、あの当時戦車と飛行機が充分あったら、早急に蒋介石軍の終末が来たと思います。軍上層部の判断力不足でした。

昭和十四年四月、中隊に移動命令が下り、武漢

三鎮の揚子江に流れ入る支流の上方辺り（距離五〇キロ）地点の警備をせよということでした。この河を利用して軍の物資輸送を現地中国人の船や船頭を使用して行っていた関係で、この河川の警戒と船へ乗船して警乗警備することでした。

歩兵は最前線で敵と対峙することは、千軍万馬の古年次兵は充分活躍できるでしょうが、自分達はまだ自信がありませんでした。しかし敗残兵や便衣隊・ゲリラ等は自分達でも充分撃退できる自信はありました。この地にての勤務は今申しました警乗のほか、分哨での警備、立哨、動哨と夜間の不寝番等で自分達応召補充兵にもできる仕事でした。

そして六十日程経過した頃に移動命令が下りました。それも地図上ではかなり後方への転進です。何故後退か不明のまま、指示に従って行動あるのみでした。

目的地に到着。小さな村落で多数の軍隊の宿泊には不適當でしたが、小さな学校の教室を借りて

雨露を凌ぎました。近くに小さな川（クリーク）があり、身体を洗い衣服の洗濯はできましたが、便所は急造で穴を掘り、屋根と四囲の塀は戦友の大工さんの指示で即座に完成しました。兵隊には種々な職業の者が応召されてきておりますから、それぞれの業種の作業は充分できました。自分のような商人は一番役に立たず、戦友に助けられてばかりでした。

五日程過ぎた時に部隊本部の所在が確認できませんでした。西村少尉が兵十人を連れて連絡に行きました。翌日帰隊されての発表で驚きました。敵陣に対して自分達の小隊が一番後方です。そして近隣約二十〜三十キロ内に、第十六師団が全部集結しているとのことでした。中隊の全将校が集合して現況報告や部隊長命令に付いて検討、協議された由。その後二時間位で「中隊全員集合」が発令されました。自分達は「いざ決戦だ」と思っておりましたが、聴いて吃驚でした。

中隊長の第一声が「全員に告ぐ」と一段と大きく高い声にて「連隊長命令、我が第十六師団は全員、昭和十四年七月中に集結を完了し、祖国日本へ師団凱旋す」でした。全員遺漏無きように諸準備を行えということでした。余りに突然の命令で、一瞬戦友と顔を見合わせ、言葉にならぬ声が出ました。虚脱放心状態とはこのことか。今にして思えば、最前線から後方へ後方へと移動した意味が理解できます。

自分達補充隊の初年兵は約十一カ月と短期間ではありましたが、全員打ち揃って凱旋できることは、無上の幸福でした。応召兵の三十歳以上の古年次兵は、妻子を後にして国のためだと出陣し、しかも二年も三年もの間山に寝、野に伏されたことを思うと、先輩の皆様は本当に御苦労様でしたと思う。さぞかし「凱旋発表」をいかように受け取られたか、自分達には想像できない喜びだったと思います。

漢口付近に集結して、配船待ちでした。昭和十四年七月中頃より逐次各連隊単位で乗船しました。揚子江の河下りです。自分達は最終便の乗船でした。その日は八月五日と記憶しています。この中国の三千年の文化、四千年の歴史と申しますが、船上に立って滔々と流れる大河を眺めながら、故郷（琵琶湖）の水面を想い起こしました。「勢多の唐橋。石山寺の秋月、粟津の晴嵐、堅田の浮見堂、旧街道の松並木」などが長江の流れに写し出されました。

東シナ海も波穏やかでした。歩兵第九連隊の今昔を種々に想像しながら「連隊の栄枯盛衰等々」が頭の中を走馬灯のごとくし走り廻りました。

第十六師団（垣兵团）は、大東亜戦争勃発に伴い、我等が歩兵第九連隊はフィリピン、リンガエーン湾に上陸、比島戦に参戦、最後は昭和二十年レイテ島にて玉砕しました。

歩兵操典ほか諸教本より、自分が身体にて実感した事柄は、第一に歩兵は歩く事でした。一日に

しても拂曉から日没まで幾十・幾百キロでも進む体力と心意気、そして敵前においては匍匐前進です。頭上を敵弾は通過する。敵陣に突入時は大声で敵を威嚇しながら肉弾突撃です。右の条々は第一線での体験でした。

宇品に入港、上陸、防疫検査後に、軍用列車で京都へそして梅小路駅へ帰着しました。出陣時と同様の多くの人達の出迎えを受けながら伏見の連隊へ無事帰営しました。そして数日後に石山駅頭に私は立っていました。

故郷の皆様有難う。戦死された戦友の皆々様泰らかに眠り下さい。